

丸亀史料シリーズ 第13号

宝幢寺跡発掘調査報告



1980年3月

丸亀市教育委員会

序

丸龜市教育委員会は、さきに香川県教育委員会の御指導を得て奈良時代前期に創建されたと推定されている宝幢寺跡について、その伽藍配置と寺域の確認、並びに遺構の遺存状態についての調査を目的とした発掘調査を実施しました。

この調査は宝幢寺跡の最初の本格的な調査ではありましたが、諸般の状況から調査を寺域の全域に及ぼすことができず、また伽藍配置、寺域などを確認する確定的な資料も残念ながら発掘調査で得られず、今回の調査を終えたのであります。

この報告書は従来、本市文化財保護委員会が刊行しております「史料シリーズ」の一環として今回は特にこの報告書を「シリーズ第13号」として編纂したものです。この史料が埋蔵文化財研究の一助になれば幸いです。

最後に、この調査に御指導と御協力をいただきました香川県教育委員会、市文化財保護委員会、地元、その他関係機関、関係者の方々に厚くお礼を申しあげます。

昭和55年3月

丸龜市教育委員会

教育長 井澤 滋

報告書の刊行によせて

宝幢寺跡の発掘調査報告書が刊行されるにあたり、先ずこれまでに調査研究されてきた、宝幢寺について述べてみたい。

この寺は奈良時代前期の白鳳時代（645～709）に建てられた宝幢寺という七堂伽藍を有する巨刹があったが、天正年間（1573～1591）に阿波から米襲した三好軍の兵火にかかって大半が焼失し、続いて米襲した土佐の長宗我部軍の兵火で残りの堂宇も全焼してしまったので、寺域の周囲に土堤を築いて池となし、宝幢寺池と名付けた。

この宝幢寺は、もと奈良の法隆寺の分寺であったことが、『大平18年（746）10月14日勅録法隆寺伽藍縦起』と『流記資材帳』に

「処々の荘合せて46処、処々の倉34口、屋111口。右京九条二坊一処、近江国一処、大倭国二処、河内国六処、摂津国五処、播磨国三処、備後国一処、讃岐国十三処、伊予国十四処」

とあって、讃岐・伊予で二十七処、四国が過半数を占めている。讃岐の十三処は、大内郡一処、三木郡二処、山田郡一処、阿野郡二処、鶴足郡三処、那珂郡三処、多度郡一処、三野郡一処とあって、那珂郡は多い。特に那珂郡三処の内、宝幢寺は池底に残る礎石とこれに並ぶ金堂跡と推定される土壇と、講堂跡と思われる土壇が現出するので、法隆寺式伽藍配置であることが推測されている。

那珂郡の他の二処は、丸亀市田村町にこれまた塔の礎石が残存する田村廃寺と仲多度郡四条の弘安寺だと推定されている。

特に郡家町は那珂郡の郡司庁の所在地であったし、法隆寺の荘園でもあったので、分寺が建てられたものと思われる。

その宝幢寺跡発掘調査が、香川県教育委員会文化行政課の指導のもとに行なわれ、貴重な資料が発掘され、確実な記録がまとめられつつある。いま、その一部が発表されるにあたり関係者として江湖のご高恵を仰ぐ次第である。

昭和55年3月

丸亀市文化財保護委員長 吉岡 和喜治

目 次

序

報告書の刊行によせて

説 図

例 言

第1章 はじめに	5
1 調査に至る経緯	5
2 調査の経過－調査日誌（抜粋）	6
第2章 遺跡周辺の歴史	8
第3章 調査の概要	10
1 遺構について	10
(1) 土 壇	11
(2) 土 層	11
(3) 基 壇	12
(4) 塔心礎と礎石	12
(5) 溝状遺構	16
(6) 土 壤	16
2 遺物について	19
(1) 丸 瓦	19
(2) 平 瓦	22
(3) その他の遺物	25
第4章 おわりに	26

挿 図

第1図 調査区全景	5	第9図 P ₁ 底部瓦片出土状況	16
第2図 発掘作業風景	6	第10図 土壌P ₁ ・P ₂ ・P ₃	17～18
第3図 宝幢寺跡と周辺の遺跡	8	第11図 丸瓦と瓦当の接合（模式図）	19
第4図 宝幢寺跡地形実測図	10	第12図 丸 瓦	20
第5図 西トレンチ断面	11	第13図 新丸瓦の分類	21
第6図 宝幢寺跡トレンチ上層図	13～14	第14図 平 瓦	23
第7図 塔心礎平・断面図	15	第15図 その他の遺物	24
第8図 塔心礎設置状況	16	第16図 県内古代寺院の分布	26
表1 推定塔復元規模	15		
図版1 (1)土壤北東部 (2)南トレンチ断面 (3)塔心礎上面	28		
図版2 (1)溝状遺溝（右M1, 左M2） (2)土壤（P ₁ ）遺物出土状況 (3)北東調査区土壤 （左がP ₂ ）	29		
図版3 出土遺物	30		

例　　言

1. 本書は丸亀市教育委員会が香川県教育委員会の指導を得て、1978年10月～12月に実施した宝幢寺跡発掘調査の報告である。
2. 遺跡は、丸亀市郡家町字下所325番地の宝幢寺池のなかに所在する。
3. 調査は香川県教育委員会文化行政課技師沢井静芳・寒川知治両氏が担当した。
4. 本書の作成にあたって、出土遺物の整理・実測・写真撮影そして執筆は沢井・寒川両氏が分担した。
5. この調査を通じて、丸亀市在住堀家守彦氏・大西徳次郎氏、瀬戸内海歴史民俗資料館専門職員千葉幸信氏など各位から、貴重な資料の提供と御助言をいただいた。ここに謝意を表します。
6. 宝幢寺跡で出土した瓦類のうち、丸亀市文化財に指定されているものは現在、丸亀市立郡家小学校に保管されている。水煙は、丸亀市立資料館に収蔵されており、梵鐘・鉄型は大西徳次郎氏の所蔵である。

第1章　はじめに

1　調査に至る経緯

宝幢寺跡は、現在池中にあり、塔心礎周辺の出土瓦から、從来白鳳期創建の讃岐古代寺院のなかでも最古式に相当するものと考えられていた。昭和46年8月27日、丸亀市教育委員会はその礎石と出土瓦を文化財に指定し、今日に至っている。

寺跡の位置する宝幢寺池は近世に築造され、貯水期には寺跡はほとんど水没し、僅かに礎石が見え隠れするくらいであるが、減水期にはその遺構がうかびあがる。これまで発掘調査の記録がなく、その寺院構造、寺域など、ほとんどわかつておらず、遺構周辺の採集遺物により法隆寺式の七堂伽藍が建ち並ぶ讃岐国最古式の寺院跡という推測の域を出なかった。

丸亀市教育委員会は文化財保護法第98条の2により寺跡の遺構確認のため、発掘調査を実施することとなった。そして、香川県教育委員会の指導を得て、昭和53年10月11日から同年12月10日の期間をもって調査経費186万円を計上し、200m²にわたる宝幢寺跡の発掘調査を実施した。



第1図　調査区全景

2 調査の経過－調査日誌（抜粋）

10月11日(火) 晴れ 発掘調査に先立って、10時より報告祭を執りおこなう。1時より杭打ちをはじめる。塔心礎含利孔を中心として磁方位に合わせて東西南北に幅2mのトレンチを設定する。

10月12日(水) 晴れ Wトレンチから発掘開始。心礎を中心とした方形の土壇(高まり)の確認を急ぐ。

複弁八葉蓮華文の瓦当片(1/4残存)を検出する。土壇は現在、心礎上面より76cm下であり、その上面は砂礫に覆われているが砂礫のすぐ下は明黄色粘質土と練によってしめられた土壇がみえる。



第2図 発掘作業風景

10月17日(火) 晴れ Sトレンチ、調査。塔心礎より17m南で土壇が終わる。トレンチ上面に2箇所廣の広がりが確認されたが浅く、後世のものと判断された。断面実測。

10月19日(木) 曇り Wトレンチを調査。心礎から10.5m西の地点で幅1.2mの南北に走る溝(M₁)を確認。

Eトレンチ調査。上面の砂礫を排除した後、掘り下げる。

10月26日(木) 晴れ WS区の調査。上面の砂礫が多く、調査が手間取る。心礎より2m南西の地点で複弁八葉蓮華文の軒丸瓦が2点出土。早速清掃をして、出土状況の写真を撮影する。

10月28日(土) 雨 朝から雨のため、現場休業。室内作業(出土遺物の実測、資料整理)

11月 2日(木) 曇り M₁の調査。M₁内WS区に落ち込みを検出する。瓦溜まりか、

四重鉢文軒平瓦他、20点余りの瓦が出土する。

丸亀市立西・東中学校教諭8名、参観。

11月16日(木) 晴れ NE区、調査。土壤を2個検出。そのうち1つは直径2mで深さ40cmほどであるが摩滅した瓦片が多数出土した。この土壤から複弁八葉軒丸瓦が出土。

12月 1日(金) 晴れ 塔心礎周辺の消掃をして調査終了写真を撮影する。平板により地形測量。
(S 1:500)

12月 6日(水) 曇り 平板によりNトレ内ピット(P₄, P₆)実測。N₂・S・E₂トレ埋め戻しをはじめる。

12月 9日(土) 晴れ 表土、埋め戻しを完了し、調査全て終わる。

第2章 遺跡周辺の歴史

丸亀の市街地から南々東方向へ 6 km の、丸亀平野のほぼ中心に宝幢寺池と通称される三池（宝幢寺上池、宝幢寺下池、仁池）がある。

このうち宝幢寺下池が周囲約 1 km で有効貯水量 297,769 m³、最大有効水深 5.70 m を計り最大である。池は天明 3 (1783) 年の築造とされるが、この下池と南の上池、南東の仁池の接する堤に近く、池中で一段高い方形の高まりに乗った形で、塔心壁が下池池中に荒原と位置する。

この心壁を中心とした一段高い方形の土壙が宝幢寺跡とされる遺構である。

南の阿讃山脈から瀬戸内海へ注ぐ県下最大の土器川、そして西の金倉川の二河川の氾濫・沖積作用によって形成された広大な丸亀平野のほぼ中央に位置する。

原始、古代において東の香陵山塊（注1）（金山、常山、城山、郷師山）と、

西の大麻山塊（象頭山、大麻山、筆ノ山、我拝師山、火ノ上山）には、それぞれの文化相がみられる。

城山は国分台とともに旧石器の散布地として知られるに始まり、弥生時代の遺物の散布も顕著に見られる。ことに西に連なる金山の南麓の長者原遺跡は、53年弥生時代中期の住居址が発見されており、これに対する城山の郷師山遺跡にも住居址の存在が推定されている。そして古墳時代に入ると、城山東麓を中心として綾川デルタを望む形で古墳が群集してみられ、綾川右岸の新宮古墳、綾織塚は最たるものであり、かなりの勢力ある首領に率いられた集団の存在がうかがわれる。

645年、大化改新の後、律令制社会のスタートとともに、この綾川デルタを背景にした城山の文化は一挙に高揚する。この府中に讃岐国衙が設置され、軍團の創設、条里制の推進と、讃岐国の中核として政治、経済、文化とともに最高に発展したものと思われる。



第3図 宝幢寺跡と周辺の遺跡 (S = 1:50,000)

- 1 宝幢寺跡
- 2 鉢伏山古墳群（古墳時代前期）
- 3 五条遺跡（弥生時代前～中期）
- 4 郡西跡
- 5 行者原古墳

西の大麻山塊は、殊に弥生時代から後、顯著に文化が発展したようである。善通寺市三井、五条はともに弥生時代前期の集落跡が想定されており、これに続く古墳時代に入ると城山文化圏と同様に、善通寺市の西後方に控える我孫師、筆ノ山籠を中心として金倉川デルタを見下す形で古墳群が形成される。大麻山北尾根筋の標高400mに位する野田院古墳は前期に相当する長大な堅穴式石室をもつ前方後円墳であり、宮ヶ尾絵画古墳は、古墳時代後期の築造とされ、県下数少ない装飾古墳である。この後、平安時代中期以降は善通寺を中心とした莊園制社会の発展がみられる。

このように東西両文化圏に挟まれた丸亀平野に律令政治の開始とともに、およそ土器川、金倉川によって区分される鶴足、那珂、多度の三郡がおかれた。鶴足郡衙が今の土器町郡原に、そして那河郡衙が府中の因幡に伴って、その地名からわかるように丸亀市郡家町に設置され、五郷・七道の一つとして設定された南海道か羽州の甲知郷甲知原から、この郡衙を通り、善通寺市の今永井あたりとされる三井郷、龜井駅に連絡した。そして、各郡を単位として、N $30^{\circ}W$ の条里制地割がおこなわれ、那河郡の東は、旧神野村真野付近から始まるとされる。これによると、宝幢寺は二条十四里に位置する。

この那河郡枢要の地の、郡衙からおよそ1km南方に郡衙經營の寺（郡寺）として創建されたのが宝幢寺とされている。

金倉寺古記録によれば、「此寺者清和天皇貞觀年中智謙大師開基ニテ自作之聖觀音所安置之精舍也、即大師開基十七體輪中ノ其一一ニ而堂塔僧院數多有之候所天文少乱ニ御藍不残破壞仕リ基跡用水池ト相成宝幢寺池ト云今池中二大塔礎石一つ相残り、古瓦等多御座候」、とあり、宝幢寺は9世紀後半に創建され、天文年間（1532～1554）の戦国乱世に荒廃した。そして、天明3（1783）年、里正小笠原與衛門によって宝幢寺跡に溜池が築かれ、礎石は水没して今日に至るとされる。しかし、これまでこの寺跡から出土した四重孤文軒平瓦、複弁蓮華文軒丸瓦などはそれ以前の奈良時代前期、白鳳時代の特徴を示すものである。

この宝幢寺の所在した郡家郷はその後、鎌倉時代に後嵯峨上皇領となり（13世紀中葉）となり、さらに嘉元4（1506）年、『御領目録』によれば、前右衛門督親氏御の所領であり、中央の瘤門勢家の莊園としての発展がみられる。宝幢寺周辺には『地頭』『領家』などの地名があり、その名残りをとどめる。

（注）

- 1 香川大学教育学部地理学研究室編『香川の地理』
- 2 松本豊胤「香川県善通寺出土の弥生式土器」（『古代』第37号）
- 3 善通寺市『善通寺市の古代文化』
- 4 近藤末義「郡衙の遺跡とその廃寺あと」（『香川県文化財協会報』特別号）
- 5 鹿岡謙一郎『古代日本の交通路』
- 6 高重 雄「唐鏡の条理」（『広大・文学部紀要』2巻2号）
- 7 香川県文化財保護調査会『史跡名勝天然記念物調査報告第11』
- 8 丸亀市『新修丸亀市史』
- 9 京極家編『西讃府志』

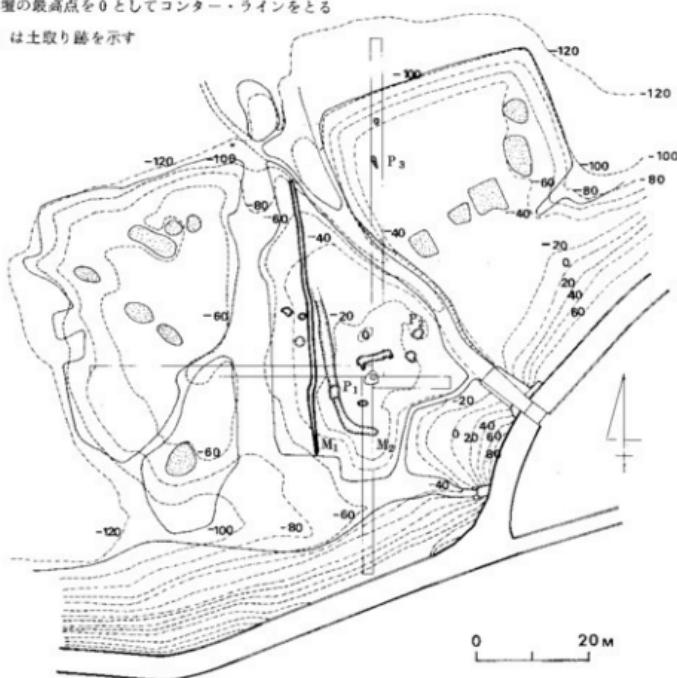
第3章 調査の概要

1 遺構について

現在、宝幢寺下池の南西部には、塔心礎を中心として土壇が広がり、その上面にはおびただしい河原石が散在している。土壇は、上池からの通水の便を図るため、二箇所掘削され、その上面も、土手改修など築堤以来幾度かにわたり大規模に削平されている。また、上壇土が良質の粘質土であるため、壁土に、カマドにと、かなり以前から地元民により土取りがされていたようで、今も所々にその痕跡が残っている。

(注) 土壇の最高点を0としてコンター・ラインをとる

◎ は土取り跡を示す



第4図 宝幢寺跡地形実測図

そのため、旧地表面は完全に亡失しているが、今回の調査の結果、土壇の構造が確認されたことにより、旧状をうかがい知ることが可能となった。土壇イコール寺域かどうかの判断は、今後さらに慎重な検討を要する問題と思われるが、少くとも寺域推定の手掛りを得ることができたのは、大きな収穫であった。

なお本遺跡の遺構について、昭和15年発行の『史蹟名勝天然紀念物調査報告第11』には、写真と共に次のような記載がある。

〔金堂址は基壇と思しき土壇あって東西約25米、南北約20米である。塔婆址は基壇と思しき土壇あって東西約15米、南北も同じく約15米である。心礎を中心として瓦礫が散在している。金堂址と塔婆址の間隔は10米、金堂址より東方20米、塔婆址より西方20米にて寺域が終わっている。〕

(1) 土 壇

土壇は、東西方向の長さが90m程である。南北方向は、北辺のみ確認できたが南にどの程度延びるのか、地表観察では判然としない。しかしその形状は、仁池や上池の池中よりも瓦片が多数出土することから考えても、方形または南北に長い矩形であることは間違いない。またいずれの場合も、心礎即ち塔は土壇の中央か主軸線上にある。古代寺院では、8世紀中頃にはば形式が固定するまで伽藍配置が一定しないので、部分的な発掘にとどまった今回の調査では、他の建造物跡の配置についてこれ以上の言及を避けたい。

ところで、この土壇の南北方向の軸は、ほぼN 20° Wに振れている。丸亀平野に現在残る条里遺構は、N 30° Wでありその差異が注目される。寺院と条里遺構との主軸の差異は、同時代に存在し、同じように官衙に隣接して建立された開法寺跡（坂出市府中町）でも報告されている。
(註10)

(2) 土 壇

土壇の土層は、基本的に3層に分けられる。上層から順に述べると、第1層は50cm大までの河原石を含む黄色粘質土層、第2層は第1層と同大の河原石を含む灰白色粘質土層、第3層は暗灰色砂礫層である。その内、第3層は自然形成されたもので、土壇として造成されたのは第1層と第2層である。この面層は、粘質土に河原石を混入してつめ固めた県下に類例の見られない特異なもので、堅牢無比な地形形成といえよう。以下、四方に延ばしたトレンチの状況を略述する。

東トレンチ　　上池の水口に近いため、長さ14mしかトレンチを設定できなかった。断面観察によると、心礎中心より第1層が4m、第2層が10m程残っていた。水口近くは、土手改修の際に土取りされたようで、灰白色砂礫層が広がっている。

西トレンチ　　長さ50mのトレンチ中、三箇所地地形の層序がみられる断面がある。これは河原石が群在する高まりの部分とも一致している。



第5図 西トレンチ断面

南トレンチ 長さ 35m のトレンチを設定。南につき出た形状をしている土壇は、17m の地点まであり、断面では基本的な土層序を良く観察できる。これより以南は、通水路や土手改修工事によって大幅に攪乱を受けており、造成層はみられない。

北トレンチ 長さ 60m と最長のトレンチを設定したが、調査は主として北 50m の土壇の落ち肩部分肩邊で実施した。その結果、肩の部分にかなり大きな河原石が配され、堅固にしている状況が確認できた。

(3) 基 壇

基壇には、外装の用材の違いにより、切石を使った壇上積基壇、玉石で築いた乱石積基壇、瓦を用いた瓦積基壇、塼を積み重ねた磚積基壇などの種類がある。内部は土を一定の厚さに置いてはその都度丹念につき固め、断面が層状になる版築という技法で築かれる。

本遺跡では、残念ながら外装用材はもちろん、基壇土さえ断面にも心壁を中心とした調査区でも検出されなかった。心壁の堤状、あるいは礎石はもとより、その抜き取り穴も無いという状況からすると、池築造の際またはその後の土手改修工事によって削り去られたのであろう。

さて、今回の調査でも、前述報告書中の写真に見られる塔基壇の周囲を画すとされる溝（第4回 M1）を検出したが、心壁からの距離はともかく溝状造構で述べる如く、出土遺物の内容や溝の方位が条單遺構にも土壤にも一致しない点など、溝が基壇の痕跡を示す遺構かどうか疑問が持たれる。

(4) 塔心壁と礎石

土壤上には、塔心壁を除くと礎石は見当たらない。南側の水口に利用されているものを除くと、土手に使用されたり、運び去られたりしたらしい。

塔心壁は、花崗岩の自然石を用い、最大幅南北 235cm、東西 230cm、高さ 120cm 以上の大きさである。平坦になった上面やや北東寄りに径 90cm、深さ 5 ~ 8cm 程の柱座が掘られ、さらにその中央に深さ 12cm、落ち肩径が 22cm あり、輕く段をもって上端径が 12cm で U 字形にうがたれている専利孔がある。段の部分を専利を奉安した心孔の蓋のためのものと考えると、形態はともかく施設の上では従来いわれてきた二重孔式心壁ではなく三重孔式心壁といえよう。
(註 1)

この外、心壁上面には、柱座より北西方向に長さ 25cm 程の排水溝が設けられている。

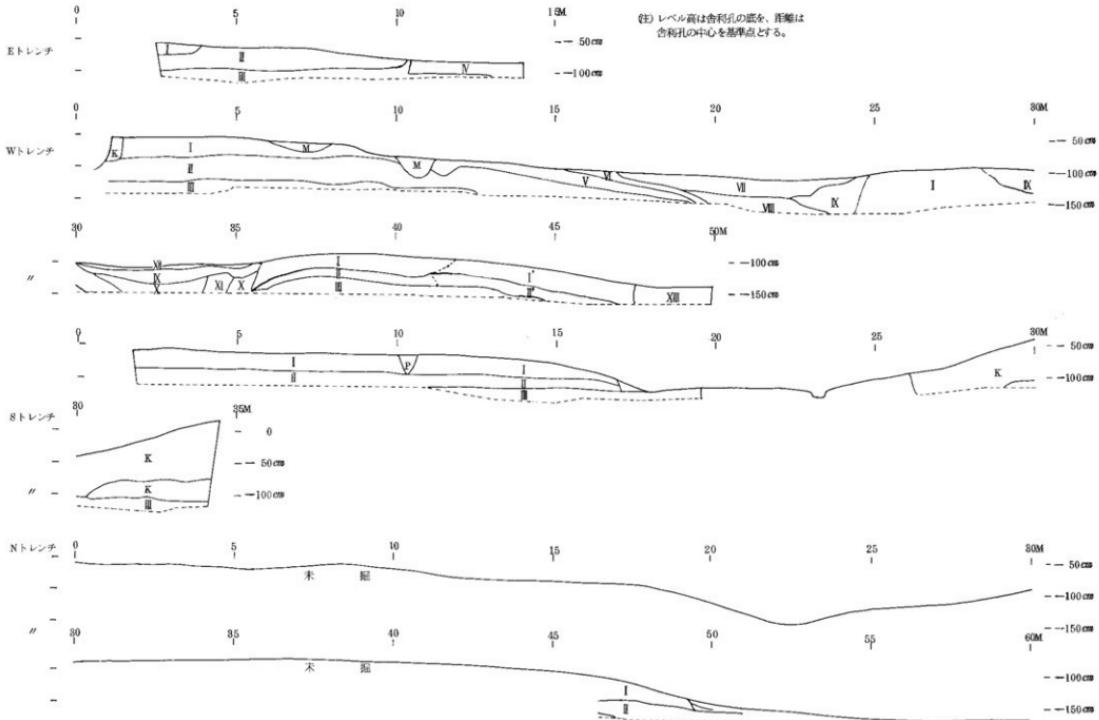
さて、心壁の設置の仕方として、地中深く埋める場合、浅く埋める場合、壇上に出る場合、の三様がある。地中深く据える場合は、心柱が壇土によってしっかりと固定されるため表面に専利孔をうがつのみでよいが、浅くいける場合や他の礎石同様地表に出る場合は心柱を据える凹窓が開けられる。

一般に飛鳥時代には地下式心壁であったものが、次第に上って白鳳時代には地表へ露出する。上面の形状も、奈良時代以降は凹底式から脣の影響を受けて柱座を作り出したものが発達する。宝幢寺跡の場合、心壁上面が周囲の水田面より 50cm、境地表面より 70 ~ 80cm 高いことから、心壁の設置状況、形状とともに白鳳時代の特徴を良く示している。

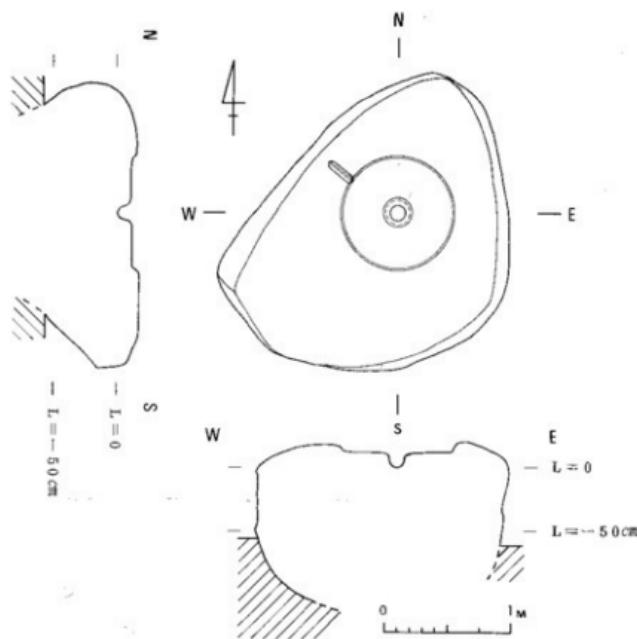
塔そのものについては、推定の域を出ない。参考までに石田茂作氏の指摘する、三重塔、五重塔、七重塔（七重塔は模型）では、塔高は心柱径のほぼ 40 倍、初重一辺長は三重塔で心柱径の 9 ~ 10 倍、五重塔で 7 ~ 8 倍、七重塔で 5 ~ 6 倍、基壇一辺長は初重一辺長の 1.5 ~ 2 倍の比になると云

凡 例

- I 黄色粘質土層
(5~80cm大の疊合)
- I' 黄色粘土層
(疊多く含まず)
- II 灰白色粘質土層
(5~80cm大の疊合)
- II' 灰白色粘土層
(疊多く含まズ)
- III 暗灰色砂質土層
- IV 灰白色的礫層
- V 明灰黄色砂質土層
- VI 明灰褐色砂質土層
- VII 暗灰褐色砂質土層
- VIII 暗灰褐色砂質土層
- K 明灰褐色粘質土層
- X 淡灰黄色粘質土層
- XI 黄褐色砂質土層
- XII 暗灰黄色砂質土層
- XIII 灰褐色粘質土層
(砂利を含まズ)
- K 近・現代礫层
- M 泥
- P 土壌



第6図 宝幢寺跡トレーニング土層図



第7図 塔心磁平・断面図

う数値によって宝幢寺の塔を復元すると表1の如くなる。

塔種	心柱径	推定塔高	推定初重一边長	推定基壇一边長
三重塔	0.9m	5.6m	8.1~9.0m	12.15~18m
五重塔	"	"	6.3~7.2m	9.45~14.4m
七重塔	"	"	4.5~5.4m	6.75~10.8m

表1 推定塔復元規模

なお、当初心礎が移動されたことも考慮に入れたが、調査の結果、心礎は第3層の上面に据えられ、それを周囲から円礎と粘質土で固めており、動かされた形跡はない。



第8図 塔心礎設置状況

溝はほとんど遺物を含まず、わずかにかなり摩滅している瓦片、土師質土器片、一見青磁の感を呈する磁器片を出土したのみである。

(6) 土 壤

心礎を中心とした調査区と北トレンチで、最近土取りをした痕跡を示すものを含めて、10個の土壤を検出した。その内、遺物を検出したのは5つの土壤である。

P₁は、南北285cm、東西195cm（落ち込み幅165cm）、深さ100cmで、落ち込み部分は平面稍円形である。底部は北部が深く、南へゆるやかに上っていく。この北部落ち込み底部から、玉縁つきの丸瓦、四重孤文軒平瓦、平瓦などのさほど摩滅していない大形の瓦片が出土した。堆積土も他の土壤と異なり、土層が三区分され、瓦をかなり古い時期に廃棄して埋めたことがわかる。

P₂は、落ち肩の径180cm、深さ50cm、底部径135cmで、平面円形である。土壤中からはおびただしい瓦片が出土した。断面観察によると、瓦片は土壤上半分より出土しており、また摩滅した小形の瓦片が多いことは、後世に瓦片が投げ込まれたものであることを示している。

P₃は、北トレンチで検出されたもので、瓦片とともに須恵器片も出土している。北西から南東方向に向かって長く、溝状に延びる可能性もある。幅は80cm、深さ25cmである。

(5) 溝状遺構

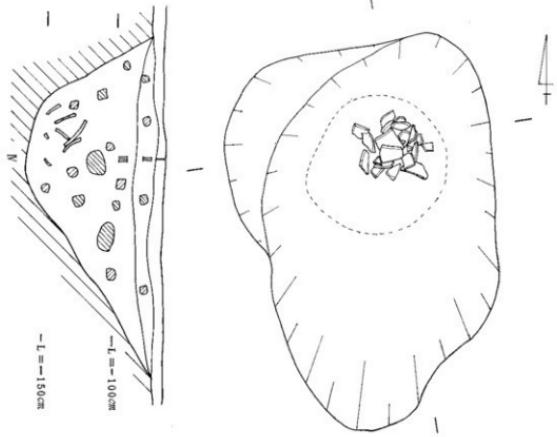
心礎より西へ溝中心で7mと10.5mの地点で2本の溝状遺構を検出した。

溝Ⅰは、幅140～200cm掘り方は浅く10cm弱で主軸はN 10°Wに走る。北に延びる部分は幅60～70cmと細くなっている。南方向で鉤形に東へ曲る。出土した瓦片は小片で摩滅しているものが多い。

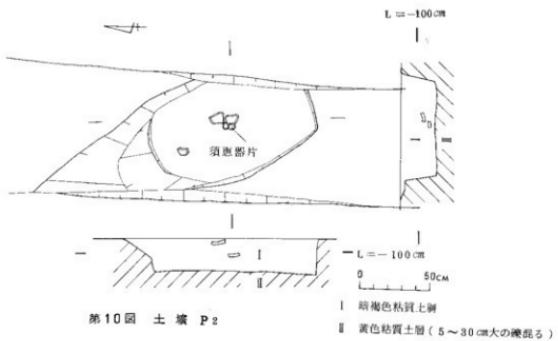
溝Ⅱは、幅80～120cm、深さ50cm程でN 7°W方向に走る。全長50m程の遺構である。この溝の性格はよく分からぬが、土壤築成後掘り込まれたと思われ、円礎を多く含むややさく黒色粘質土が溝を埋めていた。この



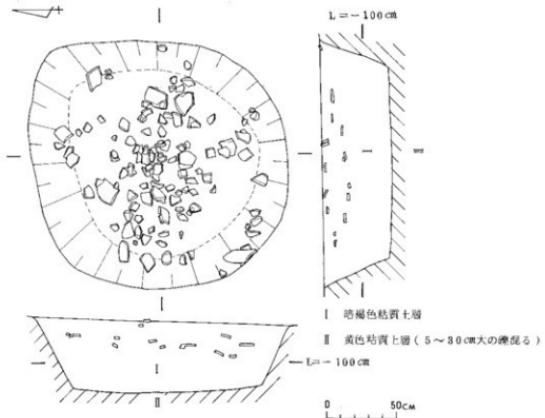
第9図 P₁ 底部瓦片出土状況



第10図 土 壤 P1



第10図 土 壹 P2



第10図 土 壹 P3

2 遺物について

調査によって出土した遺物はほとんど全てが塔心礎を中心として広がる土壇上の礎に混って、表面採集の形で取り上げられたものである。この礎は土壇を構成していたものであり、永年月の溜池のために土壇のもう一つの構成物である枯葉土が浸透作用により流失して残ったものである。そのため、土壇上に散乱するこれら平瓦、丸瓦は全て断面が摩滅して丸味を帯び、或いは瓦の調整痕が消えてしまっているのがほとんどである。

しかし、整理を進めてゆくと多種の瓦がみられ、形式分類がある程度可能になり、これまで表面採集によって处处に分散している宝幢寺跡出土と伝えられる瓦も含めて、今回の調査による出土遺物の分類を試みた。（→第15図参照）

（注18）
(1) 丸 瓦 (第12図)

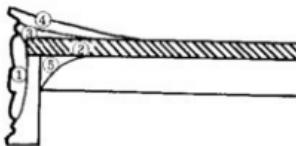
軒丸瓦の瓦当片が5点、塔心礎から2mの範囲内で出土した。いずれも中房部分を欠失しているが、①と③は、推定復元値から複弁八葉蓮華文と思われる、②は外区、周縁についてのみ文様がみられるが、規格、文様構成からすると複弁八葉蓮華文と考えられる。

①の周縁は高さ0.6cm幅0.8cmの直立三角縁(断面▲)で内傾間に鉢底文を飾り、幅0.8cmの外区には密な連珠を配している。開弁は断面二等辺三角形の明瞭な稜をもち、恐らく中房まで続くものと思われる。

花弁端切込反転形式の花弁は、狭長な2個の子葉を配し、彫りを深くして子葉を浮き立たせている。中房は凸型と思われる、花弁端が下っている。推定復元値では瓦当直径15cmで、灰青色の非常に堅緻なもので、繊細な華麗さをもつパルメットを示す。第1類に相当する。

②は外区に幅0.6cmの連珠文、高さ0.6cm、幅1.0cmの周縁には鉢底文を飾り、①とほぼ同じ型式と思われるが、若干連珠文が①より小粒である。瓦当の直径はやはり15cmである。瓦当との接合部の断面を観察すると、印籠つき法により瓦当と丸瓦を接合している。その工程は、①范型にまず中房から外区まで粘土をつめる。(模式図参照) そして、②丸瓦を嵌め込み、③丸瓦の上端部に粘土を瓦当、外区部分まで詰め、④更に周縁部分まで詰めて、丸瓦上端と瓦当上端部を接合する。この後、⑤更に丸瓦凹面と瓦当裏面を粘土により接合する。この五工程がみられる。②と③の工程間に、丸瓦凸面に③工程の粘土の接合をよくするため、ヘラにより『×』印を丸瓦凸面に刻みつけている。内面は褐色であるが、表面から0.15cmの厚さの部分だけ黒色であり、精製土を用い、なおかつ精良な土を表面に化粧がけを施したようである。非常に堅緻である。

③は瓦当の下端の厚さ0.9cmを計り、周縁は幅1.6cm、高さ0.9cmで、内傾面に鉢底文を飾る。外区は幅1.0cmで、①②に比して大粒の連珠を配している。内区の文様は開弁と花弁の一部しか遺存しないが、從来宝幢寺で知られている出土瓦からみて、単弁蓮華文からの派生を思われる花弁端円形反転形式である。第2類に属するとと思われる。



第11図 丸瓦と瓦当の接合
(模式図)



①



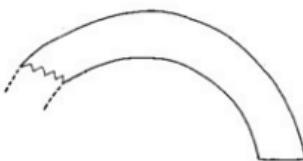
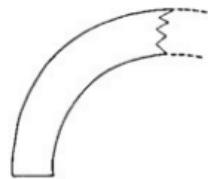
②



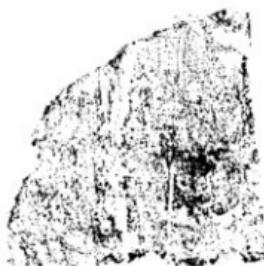
③



④

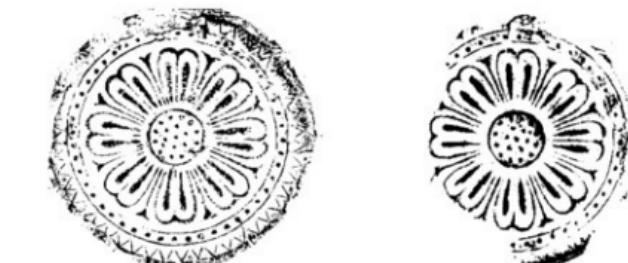


⑤

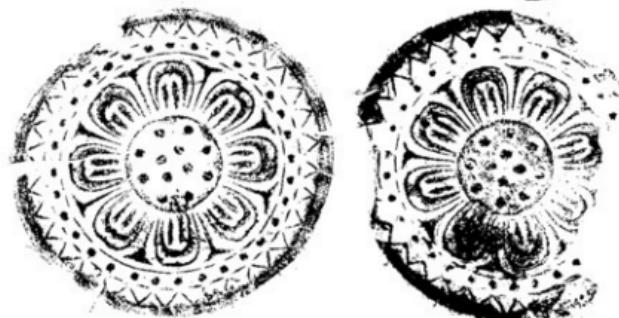


⑥

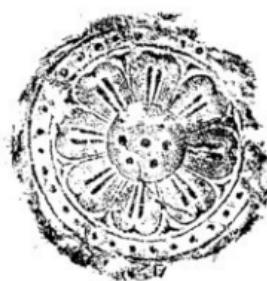
第12図 丸瓦



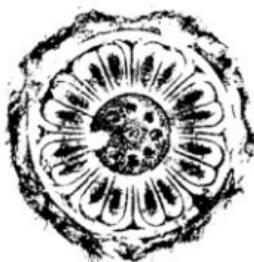
第1類



第2類



第3類



第4類

0 5cm

第13図 軒丸瓦の分類

瓦当の周囲は刷毛目がわずかに残っており、刷毛による調整のあと、ヘラによりナデつけている。瓦当裏面もヘラによってナデており、指頭痕が3箇所残る。灰青色を呈し、胎土は①②に比して精良ではない。

④は厚さ2cmの玉縁付丸瓦である。玉縁と丸瓦部との間に2.4cmの段があり、凸面はヘラによりナデつけている。両側縁は、部分的に断面三角形となる。凹面は布目(1cmに7本)をもつ。灰白色である。

⑤、⑥は丸瓦の玉縁部分であるが、2点とも瓦溜り(P_1)から出土したもので厚さ1.6cmを計る。⑤は灰白色で、片側縁をヘラによりナデつけ、凸面は布か革様のものによりナデつけている。凹面は1cmに7本の布目をもつ。⑥は非常に堅緻で、自然釉が全体にみられ灰黒色である。調整の技法は⑤と同じである。

(2) 平瓦(第14図)

繩目をもつもの、布目をヘラにより磨き消しているものの二種がみられるが、今回の調査による出土遺物の割合は後者が高い。軒平瓦は四重孤文しかみられなかったが、これらはいずれも後者に分類されるものである。

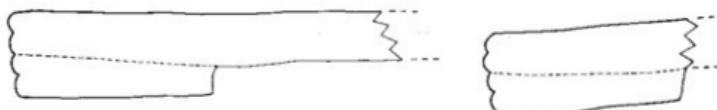
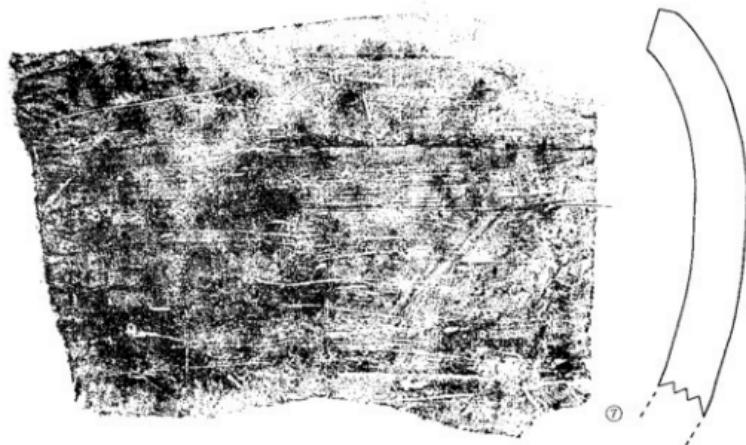
⑦は0.5cmほどの板状粘土を4枚重ね、表を革様の工具でタテにナデたあと、広端部から内側4cmの幅の部分はヨコにナデつけており、中央部分の厚さ2.2cmに対して広端部は1.9cmと若干薄くなっている。凸面は布目(1cmに10本)を消すため、ヘラにより上・下両方向からナデつけている。部分的にヘラナデの痕に沿って布目が残る。両側縁は二回のヘラナデにより断面が三角形を呈し、広端部もヘラナデを施す。灰青色を呈し、堅緻である。

⑧～⑩は四重孤文軒平瓦で⑧、⑩は瓦溜り(P_1)からの出土で⑨はNW区(心礎を中心とした調査区)である。額部まで遺存するのは4点で、その深さは8.5～8.7cmでいずれも瓦当の厚さ3cm前後であり、深額に属する。

⑧は非常に堅緻で、自然釉がかかり灰黒色となっている。側縁を断面が三角形に切り取り、凹面は瓦当端部から3cmまでは革様工具によりタテナデをし、これから端部にかけてはヨコにナデつけている。凸面額部はヨコナデをし、額部の段は1.1cmで、そこから平瓦に続く部位はヘラによりナデつけている。⑦と同様、断面から4枚重ねにより成形し、2枚目の深さで額部と平瓦部を切断し、平瓦部の2枚を剥ぎ取っている。⑨、⑩は⑧より焼成温度が若干低く、灰青色となっているが、製作技法、調整法は同じである。

出土点数の割合が少ない繩目をもつ平瓦が⑪である。これは厚さ1.6cmの平瓦片と思われるが、細い繩目が凸面に、凹面に布目(1cmに6×6本)をもつ。荒布に属する。胎土は微砂粒を多く含むが焼成が非常に堅緻で灰青色を示す。

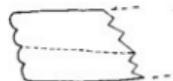
⑫は平瓦片と思われるが、凹・凸面ともナデにより調整を施すが、その調整以前に方形の刻印様のものが入っている。その深さ0.1cmであるが、後のナデにより、印が消えかかっている。灰青色である。



⑧



⑨



⑪

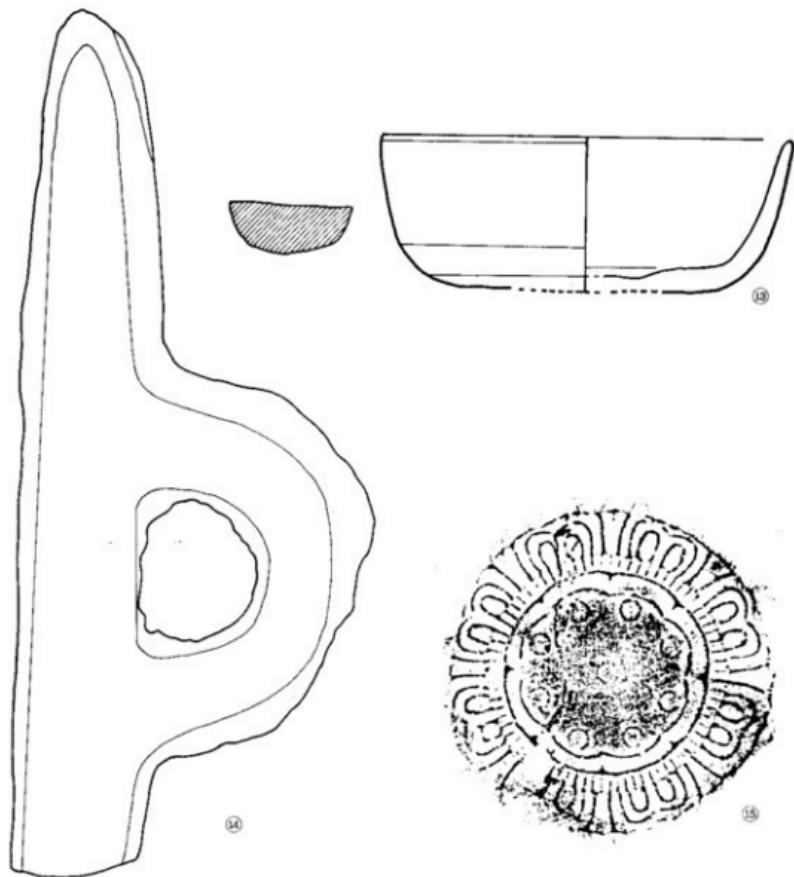
⑫



⑬



第14図 平瓦



13 环(土師質土器)

14 水堀(宝輪寺跡出土と伝えられる)

15 梵鏡(　　"　　)



第15図 その他の遺物

(3) その他の遺物（第15図）

塔心礎より西へ10mの地点を南北に通る溝から出土したのが@環（土師質上器）である。直径10.9cm、深さ3.7cmを計り、内、外表面とも丁寧なヨコナデにより仕上げられている。底部は回転ヘラ切りの後、外縁部をナデにより消している。体部の内外面ともに煤が付着しているが、底部内外面は暗灰白色である。@は発掘調査によるものではなく、塔心礎より南東へ20mほどの地点で発見されたというもので、丸亀市立資料館蔵の銅製水煙である。現存長23cm、厚さ1.4cmで断面が台形状を示し、切損している。中央より先端部のやや下に直径4.5cmの円形のすかしを入れた文様をもつ。外縁は鋒放しが残る。

（注）

10 川畠 進・松本豊風『開法寺跡（香川県）』『仏教藝術』116号。

開法寺跡（N 17°W）も周辺に残る条里遺構（N 24°W）と軸を異にする。同書ではその理由として開法寺が条里施行以前に建立された可能性を指摘している。

11 石田茂作「塔心礎の研究」『考古学雑誌』第22巻2、3号。

岩井謙次「塔心礎の分類に就て」『古代文化』第80卷第8号。この点では石田茂作氏分類する所の三重孔式心礎という用語より岩井氏分類する工作として柱座、蓋受孔、合利孔を有する礎石とする方が適当か。

12 石田茂作「塔心礎の研究」『考古学雑誌』第22巻2、3号。

13 その文様構成の差違によって分類すると、4分類が可能である。（主として安藤文良著『古瓦百選』に掲載した。）

第1類 内区に複弁八葉蓮華文、外区に連珠文、周縁に線鉢唐文を飾る。小さく割と高い凸型の中房に、（1+6+12）個の蓮子を配する。外区の珠文は小粒で密な感じを与える。

直径15cmほどで繊細な美しさをみせる。

第2類 第1類と文様構成は同じである。中房、蓮子、珠文いずれも全体に大柄で直徑17～19cmを計る。中房は若干凸型を示し、中心のない（4+8）個の蓮子を配する。内区の蓮華文は一單弁を思わせるが、子葉の周囲をはりくばめる。

第3類 誉岐国分寺から同范とされる瓦が出土している。やはり第1、2類と同じ文様構成であるが、中房は第2類よりさらに低く、蓮弁よりわずかに高い程度である。（1+6）個の蓮子を配する。狭長な二個の子葉の扇形を振り下げている。間弁は第1、2類と異なり、中房まで続かず、三角形を呈する。

第4類 仲村庵守、普通寺伽藍から出土の瓦と同范瓦とされる。普通寺市下吉田九頭神社出土の瓦と酷似している。第1～3類と異なり、外区に珠文帯をもたない。周縁は摩滅して、その文様は不明である。内区の中房は若干凸型をみせ、（1+8）個の大粒の蓮子を配する。花弁の子葉は、第1～3類までと異なり、ことさらにはりくぼめてつくりだしていない。直径15cmを計る。

14 石田茂作『飛鳥・白鳳期の古瓦』、以下この分類による。

第4章 おわりに



第16図 県内古代寺院の分布

推古32(624)年に46箇寺を数えた古代寺院は、強固な律令体制が確立される白鳳時代後期(注15)には全国545箇寺に及ぶ。さらに、奈良時代には諸国の國分寺をはじめ、その数700箇寺に及ぶとされ、伝来後の仏教の普及と寺院造営の風は急激であった。飛鳥・白鳳期における讚岐の寺院は17箇寺を数え、900年に成立した菅原道真著の『菅家文草』には府中・圓法寺ほか28箇寺の存在が知られる。

今回の調査は、伽藍配置、寺域などを確認する資料が残念にも得られなかった。これは池築造により本来の伽藍跡が全く破壊されてしまっていることによると考えられる。しかし、これまでこの寺跡から見受けている古瓦は数分類がなされ、ある程度の年代幅をもち、その存在を裏づける様な例証が報告されている。

丸瓦については藤原式軒丸瓦以外に第4類が知られる。このうち第3類は國分寺出土瓦と同轍(注16)とされている。平瓦については重弧文軒平瓦、ことに今回の調査では全て四重弧文しかみられなかつたが、数点の平安時代の唐草文の出土例も報告されている。このように、丸・平瓦とともに遺物の数点から、正側的に奈良時代前期の特徴をよくし、わずかに平安時代の遺物をみることができると、その創建期においては藤原宮式軒丸瓦の第1類と「宮の四大寺」としてあった川原寺にみられる四重弧文軒平瓦をセットとする形式が考えられる。そしてその他の遺物から、持統・文武朝(686~707年)を中心とした白鳳時代後期から平安時代までの宝幢寺の存在が考えられる。(注19)

宝幢寺の経営基盤の実態、国衙—郡衙を結ぶ讃岐国古代政治勢力のなかで宝幢寺のおかれた位置、そしてその創建期における川原寺・石川寺をはじめ藤原京を中心とした大和の古代政治勢力との交流など様々な課題の解決が今後に残るが、周辺にみられる仲村庵寺・弘安寺・田村庵寺などほぼ同時期に丸龜平野に依拠していた古代寺院の勢力図とその相関関係から、那珂・多度郡の古代社会を明らかにする突破口が開かれる期待をもつて期待したい。そして、律令国家体制の高揚期における中央政治と地

方のそれとの交渉を通して、讃岐國における仏教の発展と古代社会を明らかにする一資料となることを願う。

(注)

15 植垣晋也編『古代の瓦』(『日本美術』11)

16 『飛鳥・白鳳期の古瓦』では第2類を石井庵寺・始覚寺・長楽寺とともに藤原宮式(白鳳後期)として分類している。

17 安藤文良編『古瓦百選』

18 同上著『古瓦図録』

19 前掲『飛鳥・白鳳期の古瓦』

20 前掲『飛鳥・白鳳期の古瓦』によると複弁蓮華文軒丸瓦と單孤文軒平瓦のセットで開法寺・法勸寺とともに川原寺式に分類される。さらに複弁蓮華文と均正忍冬唐草文軒平瓦のセットで善通寺・道音寺とともに法隆寺式とされる。

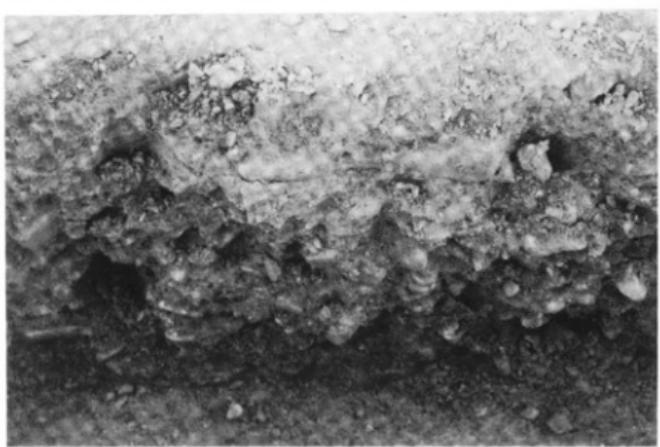
図 版

図版 1

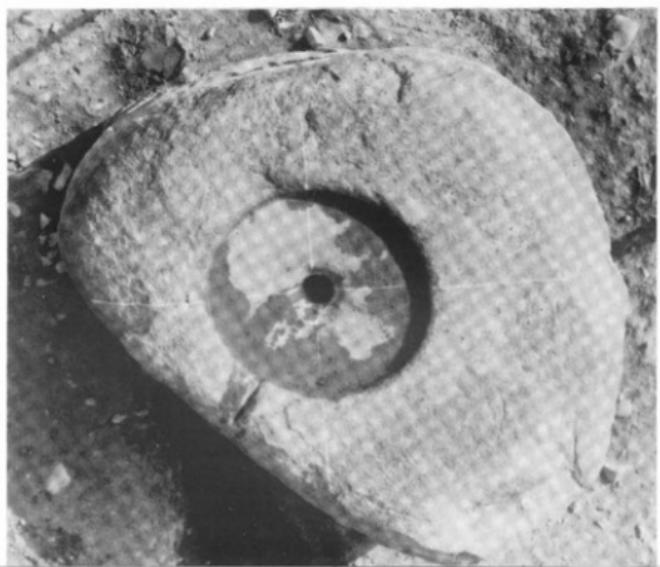
(1) 土壙北東部



(2) 南トレンチ断面



(3) 塔心礎上面



図版 2

(1) 溝状遺構
(右M1, 左MII)



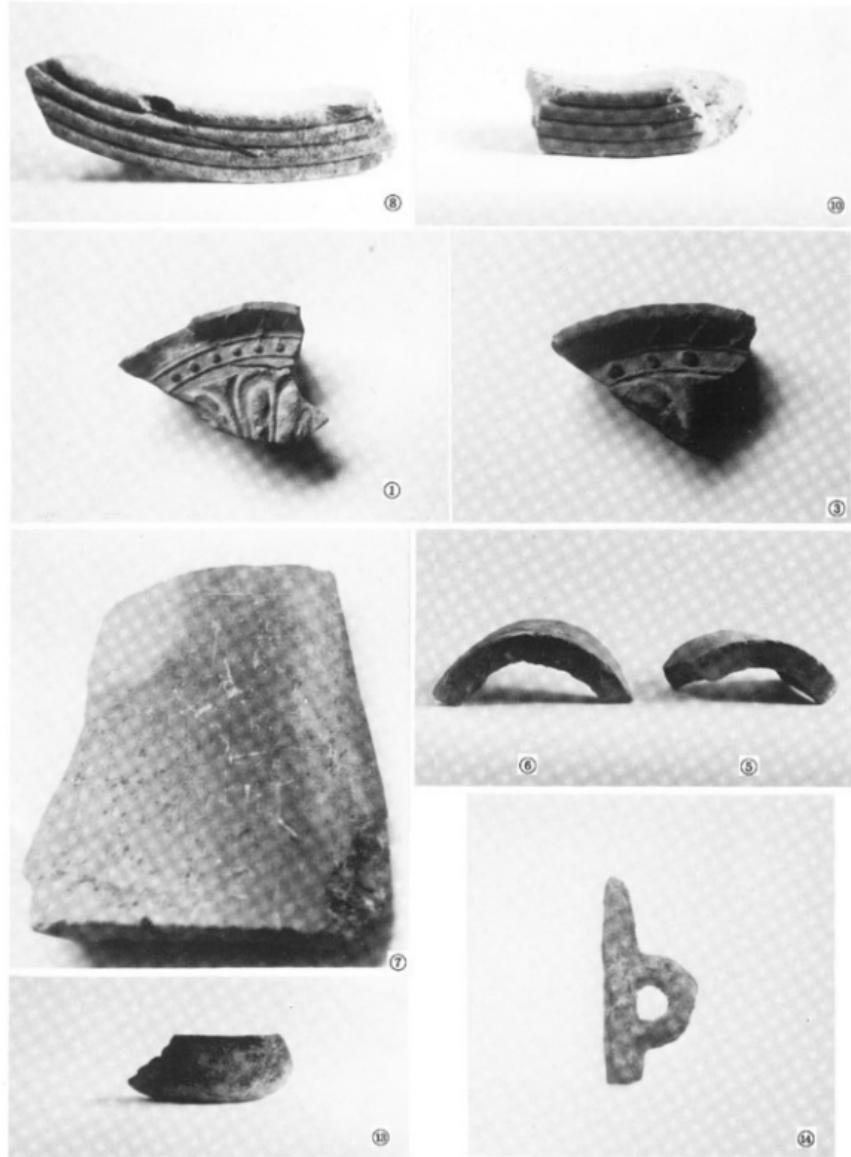
(2) 土壌(P1)遺物出土
状況



(3) 北東調査区土壤
(左:P2)



図版 3



出土遺物